

令和六年度入学式 式 辞

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。これから始まる滋賀大学での学生生活に期待をふくらませているものと思います。皆さんのご両親やご家族もさぞかしお喜びのことでしょう。桜も満開となり、皆さんの門出を祝っています。コロナ禍も一定の収束を見せるなかで、このように盛大に入学式を挙行することができ、皆さんの一生の思い出になると思います。教職員一同、皆さんのキャンパスライフをしっかり支えていきます。大学や大学院で経験するさまざまな課題に積極的に取り組み、充実した大学生活を送ってください。

一方で、世界は未曾有の変化に見舞われています。皆さんはこれから激しく変化する世界に直面することでしょう。まず、私達が直面する二つの大きな変化についてお話したいと思います。一つはコロナ禍の影響です。もう一つは世界の紛争です。いずれもそれまで私達が感じていた安心感を根本から覆すものでした。コロナ禍は、医学の進歩により病気が克服されるという安心感を覆しました。世界の紛争は、世界が平和に向かっているという安心感を覆しました。

まずはコロナ禍を振り返ってみたいと思います。新型コロナウイルス感染は今から四年前の二〇二〇年の冬に突然始まりました。滋賀大学でもその年の入学式を行うことができず、キャンパスへの学生の立ち入りも制限しました。その翌年の二〇二一年の春には変異株であるデルタ株が流行しました。そして、その翌年の二〇二二年の冬にはオミクロン株が出現し、感染が再度拡大しました。幸いオミクロン株の重症化率は低く、一昨年はある程度コロナ以前と同様の大学生活を送ることができました。そして昨年四月からはすべての制限を解除し、通常の大学生活が戻ってきました。

このような目まぐるしい状況の変化のあと、コロナ禍は一応の収束を見せていますが、この経験を振り返り、未来に活かすことは重要です。今後も人類は新たな感染症に直面することがあるかも知れません。コロナ禍に対する対応は、各国とも最終的には集団免疫の獲得の方向となりましたが、それまでの対応はさまざまでした。中国は昨年一月までゼロコロナ政策をとりましたが、その後一気に制限を解除しました。ヨーロッパの各国は当初はロックダウンという厳しい制限を設けましたが、日本より早く制限を解除しました。日本では、二〇二〇年四月から二〇二一年九月まで、緊急事態宣言が断続的に四回に渡って出されました。緊急事態宣言はロックダウンよりは緩い措置でしたが、昨年五月に新型コロナウイルス感染症が五類になるまでは、さまざまな制限がありました。これらの各国の政策のどれが適切かは、事前に判断するのは困難で、各国とも感染防止と経済社会活動維持という対立する要請のバランスをとることに苦慮しました。また新型コロナに対するワクチンの早期提供は大きな科学的成果でしたが、mRNAワクチンという新たな方式のワクチンであったため、ワクチンに対する意見の相違も見られました。ワクチンについても、有用性と副作用のデータを継続的に収集し、社会的合意を形成していく必要があります。

以上のように、コロナ禍の負の影響は大変大きいものでしたが、一方で、コロナ禍により社会の変化が加速されたというポジティブな面があることが重要です。禍を転じて福となすという格言のように、困難は進歩を生み出します。コロナ禍の中で必要に迫られて、大学ではオンライン授業が行なわれ、企業では在宅勤務が行なわれました。そして仕事の仕方が大きく変わりました。これらはデジタル技術によって可能となったことであり、コロナ禍によって、いわゆるデジタルトランスフォーメーションが急速に進展しました。現在でもオンライン会議は定着しています。学生の就職活動も変わりました。コロナ前は、大都会に出かけて企業を訪問するという就職活動のスタイルでしたが、面接などがオンラインとなりました。これは実は地方大学の学生にとっては、都会の学生と比べて相対的に有利なことです。デジタルトランスフォーメーションは地方創生の一つの重要な鍵となります。

次に、現在世界で起きている戦争について触れたいと思います。二年前に始まったロシアによるウクライナ侵攻は長期化し、まだ終わりが見えてきません。また昨年十月七日にはイスラエルとハマスの間の戦争が始ま

りました。この戦争も先行きが見通せません。どちらの戦争でも、町が破壊され、犠牲者が増え続けている状況です。戦争の悲惨な被害は毎日のように報道されており、一日も早く平和が回復されることを祈っています。戦争が長引き犠牲者が増えるごとに、憎しみの連鎖が続いていきます。ウクライナとロシアの戦争がどのような形で終わっても、両国の人々は何世代にも渡って、仲良く暮らす気持ちには、なれないのではないのでしょうか。日本と近隣諸国の関係においても、第二次世界大戦の影響が今でも残っています。イスラエルとパレスチナについては、お互いの存在さえ認めないような激しい対立が長く続いています。ロシアはもちろんのこと、世界の大国であるアメリカや中国も指導者の交代や権力の委譲の面で不安定化の要因を抱えており、世界への影響が懸念されます。

このように世界は不安定になっていますが、幸い平和な日本に住む私達は、この平和を積極的に守っていくことが重要です。コロナ禍の収束もあり、いま日本には外国から多くの旅行者が来ていますが、その一つの理由は、日本が平和で安全だからだと思います。平和な国が経済や文化を発展させ、戦争をする国が衰退する。そのことによって、世界がまた平和に向かっていくのではないのでしょうか。私達はこのことを念頭において、日本を発展させていく必要があります。

世界が不安定化する中で、日本は日本だけで存在することはできません。平和な日本に閉じこもっていることはできません。日本のエネルギー自給率は十数パーセントです。食料自給率は四十パーセント未満です。日本は世界との貿易で支えられているのです。日本は、世界の中でルールを守りつつ、他の国と競争していかなければなりません。滋賀大学は「湖国から世界へ」というキャッチフレーズを使っていますが、皆さんには世界と戦える人材になってもらいたいと思います。世界の変化を理解し、変化に柔軟に対応し、創造性を発揮できる人材の育成が大学教育に求められています。

ここで、大学での学びと高校までの学びの大きな違いについて述べたいと思います。コロナ禍に対する対応でも、世界の紛争についても、単純な正解はありません。大学での学びと高校までの学びの大きな違いは、正解があるかないかという点にあります。高校までの学びでは、入学試験対策という観点からも、試験問題を解くことに重点が置かれがちだったのではないのでしょうか。それぞれの試験問題には正解があり、それを早く見つけるという訓練をしてきたと思います。一方で、大学で学ぶ学問では、多肢選択で選ぶような唯一の正解はありません。大学学部から大学院に進む段階では、問題自体を見つける、あるいは問題を定式化するという作業が本質的となります。大学では、短時間で答えを見つける必要はありません。皆さんそれぞれが問題意識を持って、社会の様々な問題についてじっくり考え、その解決を考えていただきたいと思います。

世界で戦える人材になるための一つの武器はデジタル技術です。実はデジタル技術の活用において、日本は世界に遅れています。IMD世界デジタル競争力ランキングというランキングで、二〇二三年に日本は総合三十二位と評価されました。これは先進国としては極めて低いものです。皆さんは、デジタル技術を身に付け積極的に活用してほしいと思います。最近大きな注目を集めている生成AIについても、滋賀大学は積極的に活用する方針を掲げています。また滋賀大学では創造性を育むために、リベラルアーツ教育やアントレプレナーシップ教育にも力をいれています。

大きな変化の時代は、不安の時代であるとともに、可能性の開けた時代です。滋賀大学の中期目標のキーワードは未来創生大学です。世界が未曾有の変化に見舞われるなか、皆さんが滋賀大学での学びを通して、未来を切り拓く人材に育ってくれることを願っています。

令和六年四月四日

国立大学法人滋賀大学長 竹村 彰通